

緑の風記念三重医学研究振興会賞(基礎医学・看護学部門)

氏名(年齢) 松岡 真里 (53 歳)

所属・職名 三重大学大学院医学系研究科看護学専攻 教授

受賞の感想と今後の抱負

この度は、栄ある緑の風三重医学研究振興会賞を賜り、誠にありがとうございました。これまでご指導いただきました先生方、諸先輩方、共同研究者のみなさま、ならびに選考委員の先生方に心より感謝申し上げます。

今回の受賞を励みに、小児がんや重い障害があるこどもの苦痛が緩和され、こどもらしく過ごせることに少しでも貢献できるよう、これからもますます研究に精進してまいります。

今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

受賞テーマ

「小児がんや重い障害のあるこどもの緩和ケア（小児緩和ケア）に関する研究」

研究の概要と将来展望

小児緩和ケアは、苦痛の緩和、意思決定支援、ビリーブメントケア（死別後のケア）がおもな要素となる。小児がんや重い障害、難治性疾患等のこどもに加え、医療的ケアを必要とするこどもも「小児緩和ケア」の対象とされる。重い障害や難治性疾患のあるこどもが体験する苦痛を緩和することは、看護師にとって最も重要な役割である。また、こどもの発達上の特性から、生命に関連する治療やケアは、親が選択することが多く、倫理的葛藤をもたらすことが少なくない。親の意思決定は、こどもの終末期の Quality of Life だけでなく、死別後の親の体験にも影響するため、看護師の支援が重要となる。生命が脅かされる状況にある小児緩和ケアのこどもとその家族の身体的、心理的、社会的、そしてスピリチュアルな苦痛が緩和され、どこにいても、どんなときもこどもらしく、家族らしく暮らせることを支えるために、質の高い小児緩和ケアの提供がより一層求められる。しかし、日本では、小児緩和ケアや終末期に関連する研究が乏しく、また、小児緩和ケアに関する看護師教育も開発されていないという課題があった。

そこで申請者は、これまで、小児がんのこどもをもつ親の意思決定に関する研究、医療的ケアが必要となるこどもの病院から自宅に帰ることを支えるための看護の役割に関する研究、また、小児・思春期・若年成人（Adolescent and Young Adult; AYA）にある小児がんのこどもの経験に関する研究に取り組んできた。現在は、日本国内の小児看護専門看護師と研究班を作り、小児緩和ケアに携わる看護師の小児緩和ケアに関する実践の実際を明らかにするとともに、アメリカで開発された小児緩和ケア看護師教育プログラムを日本の医療・文化に適した内容に修正した日本版小児緩和ケア看護師教育プログラムを開発、実装し、看護師の実践の向上を図ることを目的とした研究に取り組んだ。これまでに、パイロット的な実装も含め、日本全国 150 名近くの看護師が教育プログラムを受講し、受講前後の小児緩和ケアの実践の変化に関する質問紙およびフォーカスグループ面接調査を実施してきた。調査の結果、日本の看護師の小児緩和ケアの実践に関する実態として、死に関連するコミュニケーションや身体的以外の苦痛のアセスメントやケアが十分でないこと、また、重い障害のあるこどもを対象とする看護師の実践が低いことが明らかとなり、今後重点を置くべき教育内容や対象を見いだすことができた。また、小児緩和ケアに関する国外の看護師教育プログラムとその評価指標に関する文献レビューを行っており、今後、看護

師の実践のみならず、態度や自信というケアに影響する要因を明らかにすることにも取り組む。

日本の小児緩和ケアは、世界の中で、5段階中下から3つめのレベル3であり、実践と教育は国際的に低評価である。本研究は、日本で初めての系統的・包括的な小児緩和ケアに関する看護師教育プログラムであり、看護師のケアの質向上のみならず、小児緩和ケアの国際的な評価の向上にもつながりうるものである。本研究で開発している小児緩和ケアに関する看護師教育プログラムを通して、看護師が行うケアの質向上を行うことで、重い障害や難治性疾患等のこどもの Quality of Life やこどもとの死別後の親の体験の変化をもたらすことができる。また、三重県は、三重大学医学附属病院小児・AYA がんトータルケアセンターを中心に、医療的ケアが必要なこどもの支援や小児がんのこどもの終末期ケアに対して積極的な取り組みが行われており、申請者たちの知見をもとに共同研究を行うことで、三重から小児緩和ケアの質向上に向けた研究成果の発信に寄与できる。

本研究に関連する代表的な原書学術論文（5編）

1. Matsuoka M & Narama M. Parents' thought and perceptions on hearing that their child has incurable cancer. J Palliat Med. 2012 Mar; 15(3) :340-6.
doi: 10.1089/jpm.2011.0410.
2. Nagoya Y, Matsuoka M, Takenouchi N, Hirata M, Arita N. et al. Nursing Practice and Care Structure for Children and Their Families in Need of Pediatric Palliative and End-of-Life Care in Japan: A Nationwide Survey. J Hosp Palliat Nurs. 2023 Apr 1;25(2):E41-E48.
doi: 10.1097/NJH.0000000000000933. Epub 2023 Jan 25.
3. Takenouchi N & Matsuoka M. The Experience of Adolescents and Young Adults in Their Cancer Journeys in Japan: I Try to Move Forward With Feeling That I Would Be Okay With "My Cancer". J Adolesc Young Adult Oncol. 2024 Jul 15.
doi: 10.1089/jayao.2024.0017.
4. Aoyama T & Matsuoka M. A Case of Successful Rehabilitation for Controlling Chronic Pain Following Osteonecrosis of the Femoral Head in a Young Adult Cancer Survivor. Cureus. 2024 Jan 11;16(1):e52120.
doi: 10.7759/cureus.52120. eCollection 2024 Jan.
5. Shinohara Y, Morino T, Shimoura K, Niu Q, Mukaiyama K . . . Matsuoka M. (15th) , et al. Comparison of Psychological Quality of Life Between Long-Term Survivors of Childhood Cancer and Their Families. J Adolesc Young Adult Oncol. 2023 Jun;12(3):297-302.doi: 10.1089/jayao.2021.0217. Epub 2022 Aug 16.

略歴

1993 年 3 月 千葉大学看護学部
1993 年 4 月 千葉県こども病院

卒業

1996 年 4 月	千葉大学看護学部	助教
2001 年 3 月	千葉大学大学院看護学研究科 博士課程前期課程	修了
2001 年 4 月	千葉県こども病院	
2012 年 3 月	名古屋大学大学院医学系研究科 博士後期課程	修了
2012 年 4 月	四国こどもとおとなの医療センター	
2014 年 4 月	高知大学医学部看護学科	准教授
2018 年 5 月	京都大学大学院医学研究科人間健康科学専攻	准教授
2022 年 5 月	三重大学大学院医学系研究科	教授

専門分野

小児看護学 小児緩和ケア

医学博士、専門医資格など

看護学博士（名古屋大学大学院）、小児看護専門看護師（日本看護協会）